

あろま

2010.9.28.

学校体育研究同志会東京支部 西多摩ブロック

9月例会 ハンドボールの授業 & 跳び箱の授業計画

9月18日(土)にあきる野・屋城小で西多摩ブロック9月例会が開催されました。この日初めて参加した人も含め、10人の方が参加され、内容も大変充実したものでした。

この日は、自己紹介と近況報告の後、ハンドボールの授業についてのお話を根本さんにいただきました。

その後、10月に校内研で跳び箱(1年生)の研究授業をやることになっている人の授業案について、参加者みんなで考え合いました。

ハンドボールの授業について

根本さんは現役時代、仲間とともに連日深夜まで熱心に討議しながら研究を進めてきたそうです。ハンドボールについても非常にレベルの高い研究成果をおさめてきたと言われています。この日はその研究成果の一端を、例会で話してくれました。

西多摩ブロックは今年度「ハンドボール」を研究の重点において、例会を積み重ねていくことも、この日確認されました。

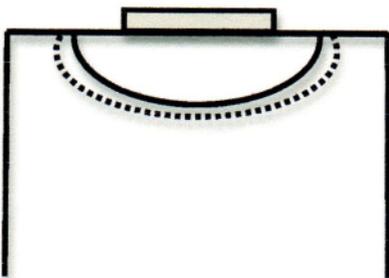
「質問」から始まる授業

根本さんはハンドボールの授業を始めるにあたって、消しゴムをたくさん用意します。ハンドボールのコートをかいたボードの上で、その消しゴムを動かしながら子どもたちに考えさせるためです。

こんな問題を出します。

【質問、1】

『攻める人(オフェンス)が2人、守る人(ディフェンス)も2人います。ボールを持つオフェンスはどのような状態になればシュートがうちやすいだろうか、図にして予想しなさい。』



これを考えていく中で、子どもたちは「ゴール前でノーマークをつくる」ことを見つけていきます。ノーマークをどのようにしてつくったらよいか学習の課題になります。

「場所と場所の使い分け」

根本さんは、ノーマークをつくりだすためには「場所と場所の使い分け」が必要だと言います。そのために、オフェンスの一方をおとりにしてもう一方をノーマークにする方法などが考えられます。

《根本さんの資料から》

1. はじめに

バスケットボールやハンドボールなどの球技運動は集団でボールを入れ得点を争う競技です。この運動の面白さは意図的に構成された攻撃システムからシュートが成功することにあります。つまり「コンビネーションからのシュート」と云うことができます。バスケットボールやハンドボールのコンビネーションは、この運動文化の構成する非日常的な『時間・空間』を巧みに使って構成されていると考えています。つまり、バスケットボールやハンドボールが要求する『時・空間』は現象としてコンビネーションの中に表現され、フォーメーションとして位置づいていきます。

球技においてコンビネーションを自由に使うことができるという事は、空間概念や時間概念を持つことによって初めて可能だと云えます。

コンビネーションは2人以上から構成されるもので、『2人の攻撃』ではふたつの空間を時間的に使い分けることによってディフェンスをシュート可能な空間（重要空間）で切り、オフェンスはノーマークになってシュートが可能になります。つまり、オフェンスはディフェンスを『時間と空間』の中でA重要空間に入るオフェンスをおとりとしたり、B重要空間に入るオフェンスをおとりにしてノーマークのオフェンスをつくり出すこととなります。ここで『「重要空間のつくりだし」と「場所と場所の使い分け」や『「2方向の選択」と「見せかけ」』『おとり』という概念を導入する必然性がでてくることとなります。

（以下略）

3人の攻めでは、「(場所を)空けて使わせる」「同時に入らない」「いつ入るか、いつパスをするかのタイミング」が大切だと話していました。

気づいたことをどんどんメモする、言葉で指示することのできる子をつくること、チームの中でできる子を2人つくって、チームの中で何をすればよいかを考えできるようにさせることなどが大切だとも話していました。

「スポーツとは、空間の中に表現すること。肉体を絵の具やえんぴつに置き換えて、バスケットボールやハンドボールの空間に表現すること。認識の外在化がスポーツの形象である。」というような話もあり、参加者みんなが圧倒されるようなすごい話でした。

1年生跳び箱の授業案づくり

10月に校内研で1年生の「跳び箱を使った運動遊び」の授業を行うことになっている人の用意してきた「指導案」をもとに考え合いました。

研究仮説から

勤め先の学校の校内研の研究課題は「自分に自信のもてる子の育成」です。「では、どうしたら自分に自信をもてるようになるのだろう」と和田さんは話し始めました。

まずは「達成感」です。運動ができるようになることです。だれもができるようになるような授業をつくることです。

そして「有用感」や「所属感」です。みんなの役に立った、みんなといっしょにできてこのグループでよかったという気持ちです。教え合う、協力することのできる学習活動をつくることです。

こんなところから研究仮説を立てていけばよいのでは...ということでした。

まず「跳び箱は跳べるんだ」という自信を

アンケート調査をしたところ、そのクラスでは、「体育がきらい」という子が38%、「跳び箱がきらい」という子が35%もいました。1年生としては多いといえるでしょう。その原因として、このごろでは幼稚園、保育園で跳び箱を扱っているところが多く、小学校入学以前に自分ではできないんだ、苦手なんだという意識をもってしまっているということも挙げられそうです。

それならば、まず全員に開脚跳びで跳べるようにして、「跳び箱は跳べるんだ」というように意識を変えたらいいんじゃないかと、また和田さんはそのための方法を話しました。

それは2台連結の跳び箱を使って、跳び箱を跳べるために必要な、腕支持や体重移動、突き放しなどをわからせるもので、これまでに授業で実証済みのものです。

運動には「リズム」が大切なので、跳び箱の「踏み切り」「着手」「着地」を「トン」「パッ」「トン」のリズムで表す、突き放しのために頭を起すことが大切なので、前方を向かせるようにする。これらのことを、「トン」「パッ」「トン」のそれぞれのリズムを言ってできているかを見る子、着地地点の前方にいて、前を向かせるようにする子に役割を分担して、グループでいっしょに協力し合って学習活動ができるようにするという話も話されました。

「みんなちがってみんないい」横跳び越し

開脚跳びができるようになったら、横跳び越しに取り組むとよいのではないかと話は進められました。横跳び越しは誰でも容易にできるようになる技でありながら、着手の方向や突き放し方、空中姿勢や着地の向きなどによって、さまざまな表現が可能な技です。

それぞれの跳び方を「ちゃん跳び」として大切にすることで、みんなが自信を持ち、またお互いに尊重しあうことにつながるように考えられます。

「だれもが」ということを大切にすると...

足に障がいがあるためにジャンプや着地に不安があるという子がいます。その子もみんなと同じような学習活動ができるようにするためには、台上前転で取り組んだ方がよいかもしいかなということも話されました。

この9月例会の内容を、次回に引き継いでいくことになりました。

根本さんのハンドボールの授業について話を、次回は実技でやってみることにしました。

また、9月例会で話し合われたことをもとにして、跳び箱の指導案をもう一度つくりなおし、次回またみんなで検討します。

西多摩ブロック10月例会のご案内!

日時: 10月17日(日) 午後1時～

場所: 八王子市立上川口小学校

TEL: 042-654-4403 (井上)

1. ハンドボールの実技提案

提案: 根本美愛さん(元明星学園)

今年度、西多摩ブロックでは「ハンドボール」を取り上げブロック研究とします。
まずは、根本さんの、9月例会でのハンドボールのお話をもとにした実技提案です。
学習内容は何か? そこには、どんな指導過程が? ボールとゴールと相手と見方。コートの中でどう絡んで結んで、得点につながるのか。そして、子どもたちは何に気付き、そこから何を学ぶのか!

低中高学年の実践につなげていきます。

2. 跳び箱(1年)の指導案検討

「1年生の跳び箱」授業案検討2回目もあります。

～跳び箱ってすっごく楽しい!～

できる・わかる・結びあえる。自信と意欲づくりへ。

実技のできる服装をご用意ください。

(ハンドボールは校庭で、跳び箱は体育館で実技を行います)

